

直売所向け花きの栽培技術

クルクマの栽培

直売所において夏の切り花の定番といえ、小ギクやアスターですが、花が長もちし、暑さに強いことから、花の少ない夏場にとっても重宝な切り花、初夏から秋にかけて花を咲かせる春植え球根クルクマを紹介します。

クルクマは、蓮の花に似ていることもあり夏の仏花として定着してきましたが、エキゾチックな花姿でありながら、花色に透明感がありどこか涼しさを感じさせてくれることから、最近ではブライダル・アレンジフラワーとしても使われるようになってきました。

特徴

クルクマは、熱帯アジア原産のショウガ科ウコン属に分類される球根性の多年草です。



ほかの草花が弱って花が咲かなくなる真夏でもよく育ちます。暑ければ暑いほどよく生長し、花色も鮮やかになります。しかし、非耐寒性で寒さには弱いため、温かい場所で保管貯蔵する必要があります。暖かいところでは、掘り起こさずそのままでも構いませんが、土の中でも10℃を下回らないような管理が必要です。

クルクマは、球根（発芽体）から長い

根を出し、その先に球根のような丸いものが育ちます。この丸い部分はミルクタンク（養分貯蔵体）と呼ばれていて、栄養が蓄えられています。このミルクタンクが十分にあると生育しやすいという特徴があります。

栽培環境

熱帯性の植物なので、日当たりが良く水はけの良い、肥沃な土が適しています。

日照時間が足りないと花つきが悪くなるので、よく日の当たる場所で育てます。

種類・品種

代表的な種類は「クルクマ・アリスマティフォリア」で、一般的には「シャールロム」の名で流通しています。このほか「ペティオラタ」「ピンクパール」などの種類もあります。

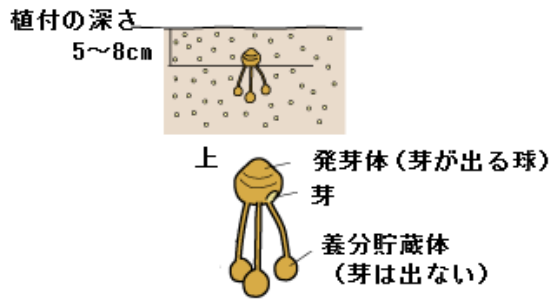
栽培管理

植え付け

高温を好むので、地温が高くなる5~6月が植え付けの適期です。球根は、4月~6月頃になると出回ってきます。

軟らかく肥沃な土を好むので、深くよく耕し、たい肥や腐葉土と緩効性の化成肥料(100~150g/m²)をすき込んでおき

ます。



球根は発芽体と養分貯蔵体に分かれたやや長めの球根なので、発芽体のう上に土が4~5cmかかる程度の深さに植え付けます。株間20~30cm、条間40cmくらいの2条植えが基準です。

植え付け時期が早い場合、発芽まで1ヵ月ほどかかるので、トンネルをかけて保温すると発芽が早まります。

発芽後の管理

トンネルをかけた場合、6月中旬頃には発芽が始まります。地温を上げて生育を早めるため、梅雨が明けるまではトンネルをかけておき、トンネル内の温度が上がりすぎて葉の縁が焼ける場合は、上方に換気用の穴をあけます。梅雨明け後は、気温が高くなるのでトンネルをすぐに取り除きます。

クルクマは乾燥を嫌い、土が乾くと伸びが悪くなるので、5~7日くらい雨が降らないときは、葉を洗うような感じでたっぷりと水をかけてやります。

追肥

発芽後、葉が展葉し始めたら月に2回ぐらいの間隔で1,000倍程度の液肥(10-5-8)を施します。

病虫害

クルクマは強健な植物なので、花の内部にアブラムシがつくことがあります。病気はほとんど発生しませんが、ほかに、ナメクジやカタツムリが新芽を食害することがあるので、早めに見つけて駆除します。

収穫

クルクマは、気温の高い日中に収穫すると水上がり(水がたまり)が極端に悪くなるので、気温の低い早朝に収穫します。

切り前は7~8分咲きで、葉を1~2枚つけ(できれば葉を2枚以上残して採花)、株もとを押さえて花茎を引き抜いて採花します。収穫後はすぐにバケツにつけ水揚げをします。

球根の掘り上げ・貯蔵

秋に地上部が枯れてきたら(11月中旬頃)、晴れた日が続く土が乾いてきた頃を見計らって球根をほりあげます。掘り上げた球根は水洗いして泥を落とし、葉をつけたまま10℃以下にならない場所で乾燥させます。葉が枯れて球根と分離するようになったら(2~3週間)、パーミキュライトなどを詰めた発泡スチロールに埋め、10℃以上の場所で冬を乗り切ります。

掘り起こさずそのまま畑に据え置きする場合は、敷きわらなどで保温して土の中の温度が10℃を下回らないような工夫が必要となります。